

【 復活のトロパリ 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、  
 天使 軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリアはか  
 番兵 死 者 如 墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね  
 立 爾 潔 體 尋

たあり。なんぢはぢごくにいざなわれず  
 爾 地 獄 誘

して、ぢごくをとりこにし、いのちをた賜  
 地 獄 虜 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。  
 者 處 女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは  
 死 復 活 主 光 榮

なんぢにきいす。  
 爾 歸

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい  
 神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う  
 満 器 我 國 光

し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き ょ う せ い ニ コ ラ イ  
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ち の ぼ く ぐ ん の た あ め 、 お よ び  
 爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い  
 全 世 界 の 爲 生 命 を 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。  
 三 者 祈 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ お と せ い し ん に き  
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す 、

せ い せ い し ゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が  
 成 聖 者 亜 使 徒 聖 我

く に な ん ち を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け  
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

し に 、 な ん ち は は じ め わ が く に に お い て お の  
 爾 は 初 我 國 に 於 己

れ を が い ら い し ゃ と し り た れ ど も 、 ハ リ ス ト ス の  
 外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか  
屬 神 子 爲 あ し 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
恩 寵 與 教 會 建

たり、いまこのきょうかいのためにいのり  
今 此 教 會 爲 祈

たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん  
給 あ え 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
呼 我 善 牧 者 慶

べよ。

【 蕩児のコンダク 第3調 】

いまもいつもよよに、アミン。  
今 何 時 世 世 に い 、 ア ミ ン 。

われむちにしてちちたるなんぢのこうえいと  
我 無 知 父 爾 光 榮 遠

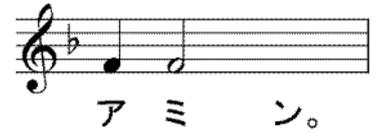
おざかり、なんぢがわれにたくせしとみを  
爾 我 託 富

あくのうちについやせえり。ゆえにとうし児  
惡 中 費 故 蕩 児

の こ え を なんぢ に さ さ あ ぐ 、 こ う お ん な る  
 聲 爾 捧 洪 恩 る  
 ち ち よ 、 わ れ なんぢ の ま え に つ み を え た あ  
 父 我 爾 前 罪 獲  
 り 、 つ う か い す る わ れ を い れ て 、 なんぢ が  
 痛 悔 我 納 爾  
 や と い び と の ひ と り の ご と く な し た あ  
 傭 人 一 如 爲 給  
 ま あ え 。

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と  
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生  
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 殺 聖 常 生 者 我 等 を  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：<sup>しゅ な よ き もの あが ほ</sup>主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、<sup>ぎ もの なんぢ そのくに</sup>ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
<sup>こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ</sup>の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 プロキメン 提綱 主日第6調 】

司祭) <sup>つつし き しゅうじん へいあん</sup>慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup>爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) プロキメン、<sup>しゅ なんぢ たみ すく なんぢ ぎょう ふく くだ たま</sup>主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに  
 主 爾 民 救 爾 業  
 ふくをくだしたま あ え。  
 福 降 給

誦經) <sup>しゅ われなんぢ よ われ かため わ ため もだ なか</sup>主よ、我爾に呼ぶ、私の防固よ、我が爲に黙す母れ、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに  
 主 爾 民 救 爾 業  
 ふくをくだしたま あ え。  
 福 降 給

誦經) <sup>しゅ なんぢ たみ すく</sup>主よ、爾の民を救い、

なんぢのぎょうにふくをくだしたま あ え。  
 爾 業 福 降 給

司祭) 睿智、

誦経) 聖使徒パウエルがコリント人に達する前書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦経) 兄弟よ、凡の物我に許されたり、然れども凡の物益あるには非ず、凡の物我  
 に許されたり、然れども其一も我に主たるべからず。食は腹の爲、腹は食の爲なり、  
 然れども此と彼と神之を廢せん、身は淫行の爲に非ず、乃主の爲なり、主も亦身  
 の爲なり。神は主を復活せしめたり、其能を以て我等をも復活せしめん。豈知らず  
 や、爾等の身はハリストスの肢なるを。故に我ハリストスの肢を取りて、淫婦の肢と爲さ  
 んか、然すべからず。或は知らずや、淫婦に附く者は此れと一體と爲るを、蓋云えるあ  
 り、二の者は一體と爲らんと。然れども主に附く者は主と一神と爲るなり。淫行を避  
 けよ、凡そ人の行ふ罪は身の外に在り、然れども淫を行ふ者は己の身を犯すな  
 り。豈知らずや、爾等の身は爾等の衷に居る聖神、爾等が神より受けし者の殿にし  
 て、爾等己に屬するに非ざるを。蓋爾等は價を以て買われたり、故に均しく神に  
 屬する爾等の身を以て、爾等の靈を以て、光榮を神に歸せよ。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、すべてのことは、わたしに許されている。しかし、すべてのことが益  
 になるわけではない。すべてのことは、わたしに許されている。しかし、わたしは何ものにも支配さ  
 れることはない。食物は腹のため、腹は食物のためである。しかし神は、それもこれも滅ぼすであろ  
 う。からだは不品行のためではなく、主のためであり、主はからだのためである。そして、神は主を  
 よみがえらせたが、その力で、わたしたちをもよみがえらせて下さるであろう。あなたがたは自分の  
 からだがキリストの肢体であることを、知らないのか。それなのに、キリストの肢体を取って遊女の  
 肢体としてよいのか。断じていけない。それとも、遊女につく者はそれと一つのからだになることを、  
 知らないのか。「ふたりの者は一体となるべきである」とあるからである。しかし主につく者は、主  
 と一つの靈になるのである。不品行を避けなさい。人の犯すすべての罪は、からだの外にある。しか  
 し不品行をする者は、自分のからだに対して罪を犯すのである。あなたがたは知らないのか。自分の  
 からだは、神から受けて自分の内に宿っている聖靈の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身  
 のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだ  
 をもって、神の栄光をあらわしなさい。

\*\*\*\*\*

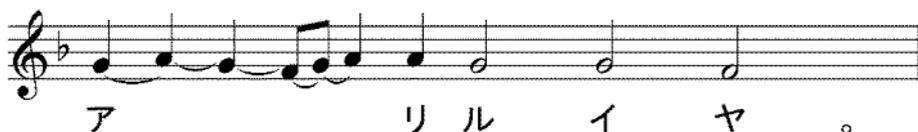
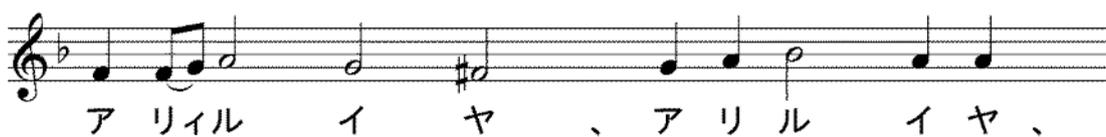
【 アリルイヤ 主日第6調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

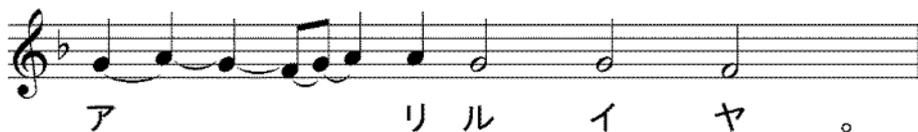
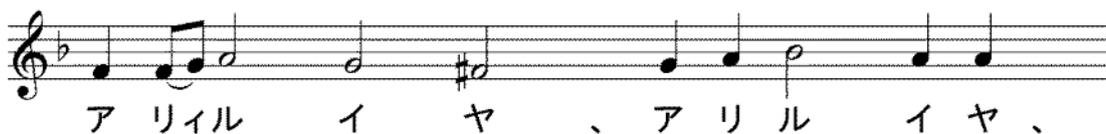
誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

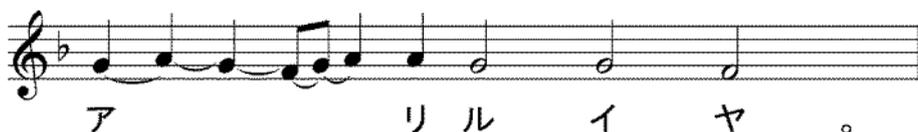
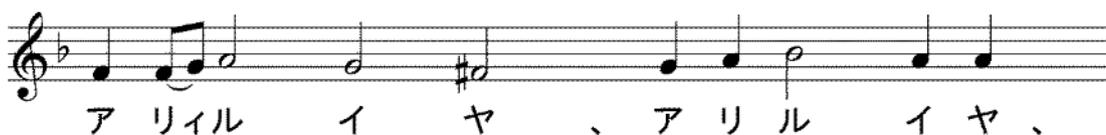
誦經) アリルイヤ、



誦經) <sup>しじょうしゃ おおい した お もの ぜんのおしや かげ した やす</sup> 至上者の覆の下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず、



誦經) <sup>しゅ い なんぢ われ かくれが われ ふせぎ われ たの ところ われ かみ</sup> 主に謂う、爾は我の避所、我の防禦、我が頼む所の我の神なりと、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が哀に爾の福たる誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ</sup> 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

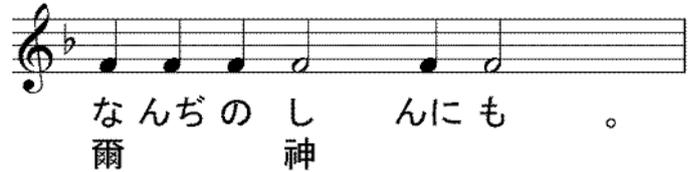
<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん  
爾は我が 靈と體との光 照なり、我等 爾と 爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ  
て生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も 世に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 79 端 15 章 11～32 節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て 聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、主は左の 譬を設けて曰えり、或人に 二の子あり、其次子父に謂え

り、父よ、我が得べき産 業の分を我に與えよ、父 其産 業を彼等に分てり。幾日も經

ざるに、次子は其得たる者を 盡く集めて、遠き地に旅 行し、彼処に放 蕩に生活して、

其産 業を浪 費せり。 盡く耗ししに及びて、其地に 大なる饑饉 起り、彼 始め

て乏しきを覺えたり。乃 往きて、其地の 住民の 一に身を寄せたれば、其人 彼を田に

遣して 豕を牧わしめたり。彼は 豕の食う豆 莢を以て、其 腹を充たさんと欲したれども、

彼に與うる者なかりき。遂に 自ら省みて曰えり、我が父には幾 何かの 傭人の糧に

餘れるあるに、我は 飢えて亡ぶ。起ちて、我が父に往きて、之に謂わん、父よ、我天 及び

爾の前に 罪を獲たり、既に 爾の子と稱えらるるに堪えず、我を 爾が傭人の 一の

ごとく 爲せと。乃 起ちて、其父に往けり。尚 遠く在りし時、其父 彼を見て 憫み、趨り

前みて、其 頸を抱きて、彼に接 吻せり。子は之に謂えり、父よ、我天 及び 爾の前に

罪を獲たり、既に 爾の子と稱えらるるに堪えず。然れども父は 其諸 僕に謂えり、最 も

うるわ ころも いだ かれ き ゆびわ そくて くつ そのあし ほどこ かつこ こうし  
美 しい 衣 を出して、彼に衣せよ、指環を其手に、履を其足に施せ。且肥えたる 犢

ひ これ ほふ われらくら たの けだしこ わ こ し またい うしな またえ  
を牽きて、之を宰れ、我等食い楽しまん。蓋 此の我が子は死して復生き、失 われて又得

ここ おい かれらたの たまたまそのちようした あ かえ いえ ちか とぎ  
られたり。是に於て彼等楽しめり。適 其 長 子田に在りしが、歸りて、家に近づける時、

がく まい き ひとり ぼく よ こ なにごと と かれい なんぢ おとうと  
樂と舞とを聞きたれば、一 の僕を呼びて、是れ何 事ぞと問いしに、彼曰えり、爾 の 弟

きた なんぢ ちち そのつつが かれ え よ こ こうし ほふ  
來りしなり、爾 の父は、其 恙 なくして彼を得たるに因りて、肥えたる 犢 を宰りたり。

ちようしいか い ほつ そのちちい かれ すす かれちち こた い み  
長 子怒りて、入るを欲せざりき。其 父出でて、彼に勧めしに、彼 父に答えて曰えり、視

われたねんなんぢ つか いま かつ なんぢ めい たが なんぢいま かつ こやぎ われ  
よ、我多年 爾 に事えて、未だ嘗て 爾 の命に違わざれども、爾 未だ嘗て小山羊を我

あた われ とも とも たの しか こ なんぢ こ あそびめ とも なんぢ さん  
に與えて、我を友と共に楽しませざりき。然るに此の 爾 の子、 妓 と共に 爾 の産

ぎよう ついや もの きた とぎ なんぢかれ ため こ こうし ほふ ちちかれ い こ  
業 を耗しし者の來りし時は、爾 彼の爲に肥えたる 犢 を宰れり。父 彼に謂えり、子

なんぢ つね われ とも あ われ ぞく もの みななんぢ ぞく ただこ なんぢ おとうと し  
よ、爾 は常に我と偕に在り、我に屬する者は皆 爾 に屬す。惟此の 爾 の 弟 は死し

またい うしな またえ ゆえ われらよるこ たの  
て復生き、失 われて、又得られたるが故に、我等 喜 び楽しむべきなり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 主は譬をお話しになった。「ある人に、ふたりのむすこがあった。ところが、弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください』。そこで、父はその身代をふたりに分けてやった。それから幾日もたたないうちに、弟は自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行き、そこで放蕩に身を持ちくずして財産を使い果した。何もかも浪費してしまったのち、その地方にひどいききんがあったので、彼は食べることに窮しはじめた。そこで、その地方のある住民のところに行って身を寄せたところが、その人は彼を畑にやっけて豚を飼わせた。彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであったが、何もくれる人はなかった。そこで彼は本心に立ちかえって言った、『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしている。立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください』。そこで立って、父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいて接吻した。むすこは父に言った、『父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません』。しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから』それから祝宴がはじまった。ところが、兄は畑にいたが、帰ってきて家に近づくとき、音楽や踊りの音が聞えたので、ひとりの僕を呼んで、『いったい、これは何事なのか』と尋ねた。僕は答えた、『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えたというので、父上が肥えた子牛をほふらせなされたのです』。兄はおこって家にはいろいろとしなかったので、父が出てきてなだめると、兄は父にむかって言った、『わたしは何か年もあなたに仕えて、一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかったのに、友だちと楽しむために子やぎ一匹も下さったことはありません。それなのに、遊女どもと一緒にあって、あなたの身代を食いつぶしたこのあなた

の子が帰ってくると、そのために肥えた子牛をほふりなさいました』。すると父は言った、『子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである』。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸

The image shows two staves of musical notation in G major (one flat). The first staff contains the melody for the first line of lyrics, and the second staff contains the melody for the second line. The lyrics are written in Japanese characters below the notes.

※ 聖体礼儀③（金ロイオアン）へ